

要である。本書における *religiosité* は、この点で我々にストイシズムを一層よく理解させる思想史の新しい視点となるであろう。

---

Carol Harrison:

*Beauty and Revelation in the Thought of Saint Augustin.*

Oxford Theological Monographs

Clarendon Press, Oxford, 1992, xi+289 p.

一色裕

アウグスティヌスが美に対して鋭い感覚をもち、しかもその思索を美について考察することから始めたのは周知のことである。しかしアウグスティヌスの美学の研究書は思いのほか少ない。本書は著者も自覚するようにスヴォボダ (1933年) とオコネル (1978年) に続く久々のアウグスティヌス美学の本格的な研究書である。本書は第1章「初期思想」、第2章「言葉・範例」、第3章「森羅万象」、第4章「人間」、第5章「受肉」、第6章「信・望・愛」の全6章からなり、前後に序論と結語が附されている。以下その内容を批判的にまとめてゆきたい。

第1章「初期思想」。アウグスティヌスにおいては理論としての *ars* と実践としての *ars* は截然と分かれたれ、魂の領域に属する前者が身体の領域に属する後者に優位し、藝術の実践は不可変の *ars* を人に想起させる限りにおいて尊重される。従って、藝術創作は不可変のものの模倣であり、そのようにして生み出されたものは不可変のものに劣る。このような考えが初期著作におけるアウグスティヌスの美と藝術の理論である。スヴォボダは彼の著作の半ば以上を費して、初期著作における以上のような「ピュタゴラス・プラトンの美学」を描いてみせ、これを範型にして残るアウグスティヌスの著作にみられる美学への言及を記録し、その思想的源泉を明らかにした。しかし彼の研究はこの言及の記録と源泉の解明に終止し、彼自らが見出したものについて反省するところがなかった。しかもスヴォボダは哲学的反省と神学的・積義的・司牧的著作を分離し、アウグスティヌスの美の理論はもっぱら前者にあると考えていた。しかし無からの創造と受肉の教説を主軸とするキリスト教神学は、時間の領域に顕現する美により積極的な価値を見出すことを約束すると考えられる。著者のみるところ、

アウグスティヌスの美学が哲学に養われたのは確かであるが、それには最初期からキリスト教の明確な刻印があり、それは神学によっても同様に養われたといえることができる。これに対してオコネルは、アウグスティヌスが理論的に退けたはずの現実の想像的創造性の証を『告白録』にあふれる豊かな詩的形象の使用に認め、別のアウグスティヌス美学の可能性を探る。それは一言でいえば、この世的なものに積極的な価値を与える「受肉の美学」(incarnate aesthetic) である。しかし彼はアウグスティヌスに語らせるよりは、自分がアウグスティヌスに語らせたいと思ったところを語った故に、この受肉の美学を正しく説明することができなかった。ハリソンはオコネルが明そうとしたものの方法的な不備によって失敗したところの受肉の美学をアウグスティヌスのテキスト全体に即して明らかにしようとする。彼女は神によって形づくられた存在の顕現 (revelatio) としての形 (forma) の美に注目する。この世的な存在も神によって形づくられた形として自らの存在を明かす限り、それはそのように形づくった神の存在を証示する。このように存在と美とその形成者を同時に示すものとして forma がある。このような forma の自覚はその形成者としての神を想起させて還帰を促す積極的な役割をおびる。このような神的なものの受肉と顕現としての美は、既に初期著作においても森羅万象・人間・キリスト・聖書の理解の内に明らかであるが、このことは初期著作では萌芽的に現われるにとどまり、後期に至って十全の展開をみるとハリソンは指摘する。

第2章「言葉・範例」。アウグスティヌスは内なる言葉と外なる言葉を分かちが、なぜ外なる言葉が必要なのか。それは人間の墮在に由来するが、しかし言葉の効用は真理を象徴的寓意的に表わすという点で積極的でありうる。しかし言葉が字義通りの意味にとられる傾向が常にあるというところに危険が付きまとい、人は真理を前にして言葉の不足を嘆かざるをえない。ここに日常的な言葉とは異なった比喩的な言葉が積極的な役割を果たす場面がある。そしてしるしから信によって確保されている隠されたリアリティーに至るための特殊な解釈の方法というものが要求されてくる。この解釈の方法はそのまま時間的世界における美の顕現のあり方というものにつながる。その意味で、言葉というものは神的なものの時間的世界における顕現ということを考える際の範例となる。ならば、彼の釈義の方法に決定的な影響を与えている修辞学というものを考えなければならなくなる。そして効果的に語り書くことが修辞学の課題ならば、それは美的なものとの関係をもってくるが、しかし美に溺れてならないとすれ

ば修辞学の正しいあり方が問われ、それはおのずとキリスト教的修辞学というものを要請する。それは快を与えることよりも、人々に隠れたものを覚醒させることを第一の目的とする修辞学である。キリスト教的真理の現象的顕現として豊かな形象に満ちた聖書は藝術作品のように扱われることを要求し、その美的効果を損なわずに隠された真理を明かす修辞学を生む。これが新しいアウグスティヌス固有の散文のスタイルを決定する。聖書は字義的と霊的の2つの意味相をもつが、寓意的解釈というのは、この霊的意味の深みを探究しようとする試みである。寓意とはそれに臨む人の自覚と理解の程度に応じて浅くも深くも理解される。この意味の柔軟性によって聖書はあらゆる人々に訴えかける力を持ち、部分的に顕わでありつつ、隠されたものへの探究へ人を誘う。

第3章「森羅万象」。森羅万象の *forma* と存在を構成するのは、尺度と数と重さ及び一性であり、それらは神の内に起源をもつとともに物体に顕現することによって神を指示する力をもつ。人間は墮在し直観を享受していないのだから信仰をつうじて正しく森羅万象に面し、そこに神の顕現を認めうるようにならなければならない。聖書も森羅万象も共に神の *verbum* の時間的顕現であるから、両者は互いに照らしあい、両者とも神の存在を証する。神の *verbum* に創造性があるとすれば、森羅万象が言語との類似でしるしとして描かれるのは驚くにあたらない。こういうしるしの特権的なものとして奇蹟も位置づけられる。森羅万象の果たすこのような積極的な役割は『詩篇講解』の内に述べられる美の意味に見出される。墮在した人間に創造主を告知するのは森羅万象の美であり、かかる美の顕現に対するふさわしい応答は讚美である。これは宗教的祈りでもあり、詩的精神の発露でもある。そしてこの讚美を機縁として至美の創造主への上昇が可能になる。

第4章「人間」。人間は神の美 (*forma*) を宿した存在であり、そのような三位一体の反映が自己の内にあることを認識するように導く神の顕現として照明説も理解される。アウグスティヌスの人間観には心身二元論を起えるところがあり、従って人間にとっての理想はこの世から逃れることではなく、心身の一性を回復することである。心身の一性の喪失、肉的なものへの傾きは *deformatio* であり醜である。このような人間の不完全性はアウグスティヌスによってしばしば淵のイメージを使って表現される。人間は神に対してのみならず自己自身に対しても閉ざされた夜である。死の性を担った人間の生はこのような淵の内をわたる道となり、従ってこの世において人間は

神の恩寵を必要とする。deformatio によっても神の像は人間から完全に失せてしまうわけではなく神の恩寵を仰いだ reformatio の可能性がある。人間に正しい自知が備われば、この世に明される恩寵をつうじて人間は再形成される。神の恩寵が具体的に顕現する場としてこの世は積極的な意味をもつ。それは内なる美と外なる美の一致の可能性を示唆する。

第 5 章「受肉」。こうして論は当然の道行きとして受肉（のキリスト）論へ移行する。そしてキリスト論はアウグスティヌスの思想の中心にある。人神一体というこの逆説的な受肉の現実にあウグスティヌスの美の理解は位置する。アウグスティヌスのみるところ、哲学者は終極は知っていたが、それへ至る謙遜の道は知らなかった。受肉のキリストの存在はこの世的なものに積極的な意味を見出そうとしたアウグスティヌス美学の土台をなす。この受肉の重視は既に初期著作に明らかであるが、後期に移るにつれて成熟し、時間的なものと永遠的なものは対立としてではなく連続・深化として把握されてゆく。ここにプラトニズムと異なったキリスト教精神がある。そして新約聖書はキリストの顕現を明かし、旧約聖書はそれを予言するという意味で、聖書は christocentric である。さらに聖書は神的 verbum そのものである。あらゆる字義の意味から霊の意味を汲むという寓意的解釈はそのまま隠れた神の美の顕現を導くことにつうずる構造を支えているのが、forma Dei でありかつ forma servi である受肉のキリストである。このような顕わでありつつ隠れた神の forma としての美によって喚起される信・望・愛によって人が自ら forma を再形成してゆくところにアウグスティヌスの思索の全体を貫いて流れる美学の基本像があることをハリソンは示し、つづく第 6 章で信・望・愛を論じて考察を閉じる。

このような reformatio の人格美学をアウグスティヌスから抽出するにあたって、著者ハリソンは自らフォン・バルタザールの影響を告白しているが、評者のみるところ本書はアウグスティヌスの美の哲学が本当の意味で語られる場面を正しく見抜き、その上で応用部門として問題となる修辞学・詩的形象その他の問題契機を適切に配置していると思われる。しかし彼女の論述は未だ外周にとどまり、アウグスティヌスの思索の内周に十分に及んではない。例えば、美の現象的顕現による reformatio を言葉の範例にとって考えようとするならば当然意味の問題を避けて通ることはできないが、本書において単なる signification と sens の区別は十分になされていない。また本書のキータームである forma を構成するのが尺度・重さ・数であるといわれる時、

これらの根本概念が内から把握されていない憾みを残す。また詩的形象に富むとしても聖書が世俗の文学と同じ精神において藝術と呼ばれうるかは大きな問題である。アウグスティヌスの哲学が「神と魂を知りたい」という『ソリロキア』の言葉で貫かれているとしたら、一層の自己認識と存在理解の深化が求められるところである。しかし、博士論文を基礎にして従来の研究文献を博搜し、豊富な註で論拠を示して描かれたアウグスティヌス美学の以上の像は、これからの研究が必ず顧みるべきひとつの新たな成果を示していると思われる。そしてこの書に描かれた美学の像は、未だ書かれるべくして書かれていないプラトンの美学を考える際にも、はなはだ示唆的であることを指摘しておきたい。著者キャロル・ハリソンは英国ダーラム大学でラテン中世の歴史と神学を専攻する講師である。

---

**Armand Maurer: *Being and Knowing.*  
*Studies in Thomas Aquinas and Later Mediaeval  
Philosophers***

Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1990, pp. X+496

渡 部 菊 郎

Armand Maurer 氏は Gilson の高弟で Toronto にある Pontifical Institute of Mediaeval Studies のメンバーとして活躍され、退官後の現在も精力的に研究されている方である。本書は氏の40年にわたる研究成果の結実ともいえる論文集である。序文において著者は、この間中世思想研究は新たな原典の校定出版を経て飛躍的に進展しているので、中世の哲学における研究状況をそのまま反映している、といっている。それゆえ、あるものは書き改められ、テキストも新しい校定本への注記がなされている。論文題目は本稿末尾に記したが、Thomas Aquinas のものが7、Siger of Brabant のものが3、Dietrich of Freiberg が1、Henry of Harclay が2、John of Jandun が1、Francis of Meyronnes のものが2、William of Ockham のものが5、エピローグとしてこれらの研究成果を踏まえて13世紀哲学との対比において14世紀哲学の特徴を浮かび上がらせる「14世紀哲学のいくつかの観点」、19世紀以来の中世思想